柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話：070-1503-6401/044-988-0004
http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo
第 163 号

かわさきの
郷土史を読む 3

小塚光治著『川崎史話』

川崎市教育委員会事務局文化財課学芸員　新井　悟

小塚光治著『川崎史話』は、最初は上・中・下の3分冊の形式で発表され、その後1冊にまとめられました。分冊形式の上巻は 1961（昭和 36）年、中巻は 1964（昭和 39）年、下巻は 1966（昭和 41）年に、いずれも多摩史談会から刊行されました。1冊本の『川崎史話』は、1987（昭和 62）年に桐光学園教育研究所から刊行されています。川崎の歴史を、原始から明治時代の初期まで通史の形式で書いたものとしては、このシリーズの第1回と第 2 回でご紹介した山田蔵太郎氏の『川崎誌考』（1927）に次ぐものであり、村上直氏の『わが町の歴史・川崎』（1981）におよそ 20 年先行するものです。

著者の小塚光治氏は、1冊本『川崎史話』の巻末にある著者略歴によると、1911（明治 44）年、当時の神奈川県橘樹郡稲田村菅に生まれました。「独学により専検に合格。」と記載されていますが、専検とは現在の大学入学資格検定の前身にあたる制度で、戦前において専検の合格は、「ラクダが針の穴を通るよりも難しい」といわれていたそうです。立正大学高等師範部歴史地理科、東京高等師範学校研究科甲類東洋史学科を卒業されたあと、生田小学校訓導、福島県立安積中学校（現高校）、川崎市立橘中学校（現高校）、川崎高校の各教諭、川崎市教育委員会指導主事を歴任されています。その後、神奈川県議会議員として 16 年間在職されています。また学校法人桐光学園理事長を務められたほか、神奈川私学団体連合会理事、神奈川県私立学校審議会委員など私学の振興に尽力されました。

1冊本『川崎史話』はB5判、574 頁の大著です。収録された写真・挿図・挿表の類は多数あり、昭和 30 年代から 40 年代の川崎の風景を写真は伝えています。

通史として書かれた『川崎史話』の面白さは、次回に書く予定ですが、今回はこの本独特の視点をご紹介します。そのために序文、しかもご自身で書かれた「自序」を読んでみましょう。序文には、本文では表現できなかった著者の思いが込められているからです。

現在の川崎市域は、住宅地が発展し、農地が少なくなってきました。駅を中心として市街地が発展し、場所によっては現代的な都市の景観さえ呈しています。『川崎史話』上巻が刊行された 1961（昭和 36）年頃は、現代につながる川崎市域の大開発が始まった頃にあたります。多摩丘陵の畑と山林を造成して住宅地を用意し、多くの人々が新しい住民として川崎で暮らし始め、住宅を建て始めた時代です。1964（昭和 39）年刊行の『川崎史話』中巻のまえがきには、次のようにあります。「私たちの郷土川崎市は、」「工業都市、京浜間の住宅地として急速な発展をつづけ、人口八〇万余にのぼる日本有数の大都市となりました。けれどもこのような急激な市勢の発展の中では、しばしば土地の歴史、文化的遺産、伝統に対してはさして顧慮が払われず、破壊されて行くことが往々にあり、最近はそれが各地で目立っています。（改行）新しい都市づくりが過去を変改しなければできないということは、ある程度はさけられないでしょうが、真に川崎市（神奈川県）を発展させるためにはその風土、文化的遺産、歴史的伝統を大切にし、それに根を下ろした精神を基にし、その上に創造的で科学性ゆたかな考え方と計画が必要だと思います。これは私が歴史を学び、教えられてきたところでもあるわけです。多摩丘陵も多摩川沖積地も日に日に変貌する今日、川崎市民（神奈川県民）の皆さんに正しく土地の歴史を知ってもらい、郷土の文化と伝統を守り、市・県を愛する精神を持っていただきたいと心から願うものです。」と。昭和 30 年代、地域社会や民間信仰等をめぐる人びとの心の世界が大きく変貌したころに、歴史を重視した小塚氏の視点が表現されているのだと思います。

『川崎史話』中巻のまえがきは、次のような言葉で締め括られています。「今日は平和日本を象徴する世紀の祭典、オリンピック開会の日です。大会の成功と日本の発展を祈りつつペンをおきます。　昭和三九年一〇月一〇日朝　小塚光治」。今の私たちからすると、高度経済成長期の光と影を感じます。『川崎史話』はこの時代に誕生した作品です。

ご興味がある方のために、川崎市立図書館の蔵書を紹介します。『川崎史話』は、上・中・下の3冊本も、のちにまとめられた1冊本も各図書館に所蔵されています（2021（令和 3）年 10 月末時点）。貸出禁止になっているものもありますが、貸し出せるものもあります。なお小塚氏には、『やさしい川崎の歴史』（1970、教育出版）という本もあり、これも川崎市立図書館に所蔵されています。

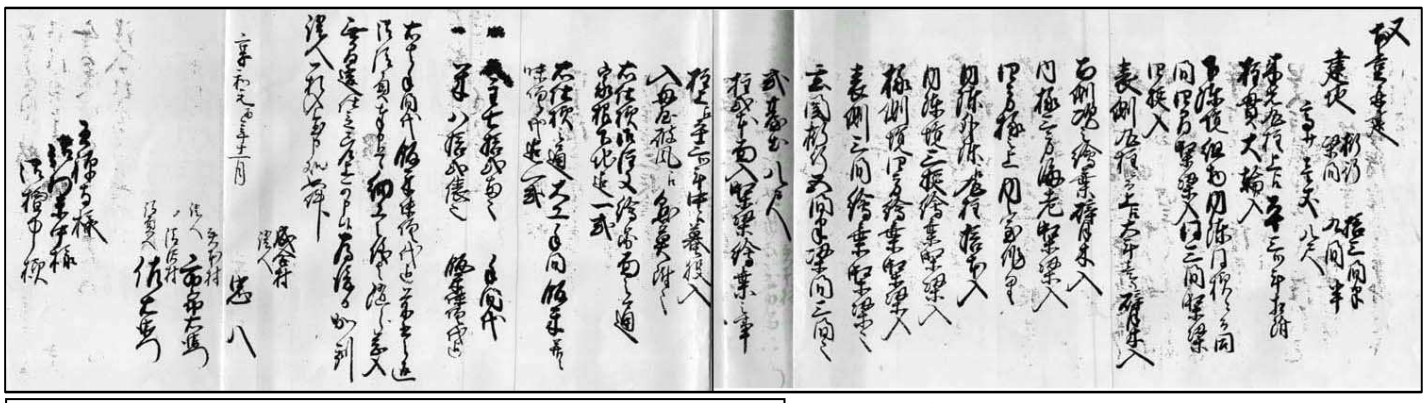
参考文献

小塚光治　1961『川崎史話』上巻／1964『川崎史話』中巻／1966『川崎史話』下巻　多摩史談会
小塚光治　1987『川崎史話』 桐光学園教育研究所
村上　直　1981『わが町の歴史・川崎』 文一総合出版

本堂の普請請負い

飛田三枝子（柿生郷土史料館専門委員）

寛政10年（1798）の火災の後に再建され、文化4年（1807）に完成し、短期間存在した王禅寺本堂についての資料を「志村家文書」に見ることができます。記録の筆者は名主弥五右衛門。弥五右衛門は寛政9年、10代で志村家の養子となり（長谷川伸三「近世農村構造の史的分析」）、文化2年から弘化5年まで43年間王禅寺村の名主でした。村役人として極めて有能だったばかりでなく、多くの記録を残しました。以下は清沢村（現高津区千年）の佐右衛門から王禅寺宛の普請の請負い状の写しですが、王禅寺についての記録文中にあるため原文の書き出し部分ははっきりしません。古文書輪読会でオンライン講読したものです。



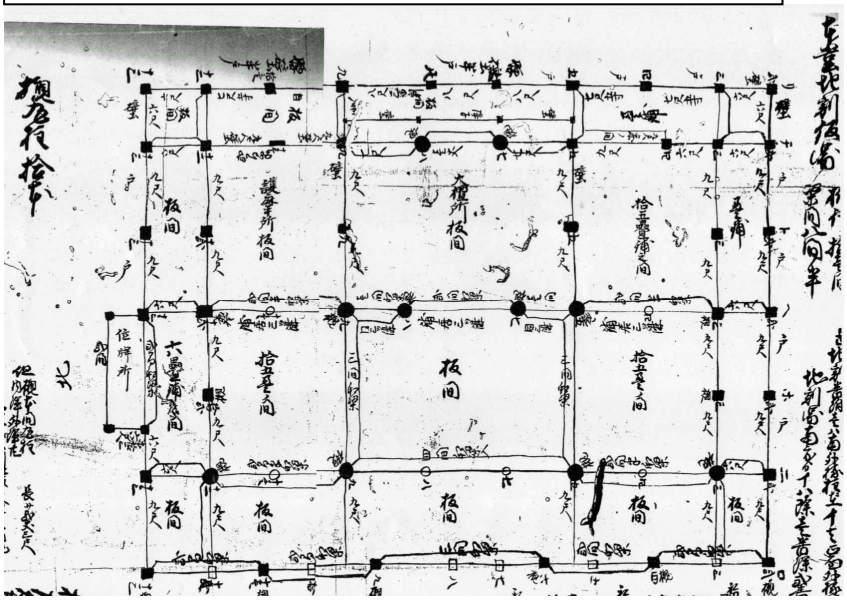
↑「志村家文書」より

本堂再建
建地　桁行十三間半、梁間九間半、高サ一丈八尺
来光丸柱上へ平三ッ斗相附け　柱貫大輪入り
下（外）陣境組物、内陣同様にて、
?間四間虹梁入り　同三間虹梁四挺入り
表側丸柱にて上へ大斗一ッ、肘木入り、
両側次の絵葉肘木入り、
内椽三方海老虹梁入り、四方椽の上内室作り、
内陣外陣へ丸柱十本入り、　内陣境三挺絵葉虹梁入り
椽側境四方絵葉虹梁入り、　表側三間絵葉虹梁也
玄関桁行五間半、　梁間三間也、　式台出八尺
柱二本面入り虹梁絵葉の事、柱上へ平三ッ斗、中へ蟇股入
入母屋破風へ懸魚附き也　右仕様御注文絵図面の通り
家根下地迄一式、
右仕様の通り大工手間・飯米ならびに味噌代まで一式
一金七十二両也　手間代
一米八十二俵也　飯米味噌代迄
・・・前書の通り御請負い申し上げ奉り候、細工の儀は随分念入れ間違い無く仕立て差し上げ申すべく候・・・・・・
　享和元酉年十一月　　清沢村　請負人　佐右衛門
　　王禅寺様
　　御門末中様
　　御檀中様

来光丸柱は来迎丸柱のことで須弥壇を囲む柱。 原文では虹梁の虹は誤字で、該当する活字がないため虹と書きました。絵葉は絵様のことで、虹梁等に施された彫り物。椽は縁の誤字。家根は屋根。正面が13間半、奥行き9間半の立派な本堂だったことが分かります。

しかし、この本堂は文化8年（1811）焼失。出火時の住職巧快は「勝手向き」を建てただけで文政4年（1821）隠居して栄法寺に戻り、その後3年間寺は無住。本堂を再建する約束で圓雅（王禅寺末寺の八朔村極楽寺出身）が住職になり、大頼母子講によって資金のメドがついた天保4年（1833）から工事が始まりました。圓雅は天保6年大病にかかり、7年に弟子の淳雅が住職を継ぎますが、淳雅は鎌倉鶴岡海光院住職を兼帯していたため鎌倉に住み、王禅寺は「無住同様」になり、末寺が交代で院代を勤める状況でした。

この時の本堂普請については詳しい資料があるので地割仮図を載せてみます。本堂は桁行11間、梁間8間半と少し小さくなりました。また本堂再建の「控え帳」には「普請の儀は、諸事、長谷川差図相背くまじき定めにて一式引請け再建」とあります。長谷川とは志村家の屋号です。天保の大飢饉のなか、資材の調達、大工人足の手配や食事の用意、諸費用の支払い等を弥五右衛門と忰文之丞が引請けて本堂を完成させたのです。



←「天保14年王禅寺本堂再建普請壱ト目鏡」より

シリーズ
教育の歩み 第3部

日本の学校と教育(8)

小林 基男（柿生郷土史料館専門委員）

庶民教育とエリート教育

明治時代の政治家の教育に賭けた熱き思いは、彼らが一人として自らの子孫を跡継ぎにせず、最も有能と見て取った若者に後事を託したことに、見事に現れています。2 世、3 世の多い現在の政界とは景色がまるで違っていました。彼らは血眼になって、日本の将来を託せる人物を探していたのです。

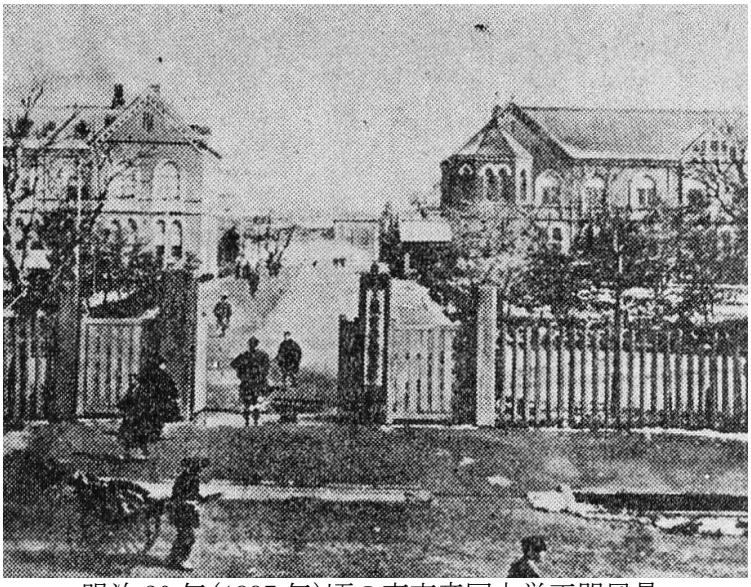
そして、種々の問題を抱えながらも、教育機関は後継者探しの要望には十分応えたといえましょう。しかしながらこの道は世界的にも狭き門でした。手元にある第一次世界大戦開戦直前（1913 年＝大正 3 年 現在）の、仏独英と日本の高等教育修了者のリストを示すと、右表の通りとなります。日本に先駆けた欧州列強においても、高等教育を受けた人たちは、人口の 0.1％程度に過ぎなかったのです。当然欧州列強よりも近代化に遅れた日本は、総人口の 0.02％となお欧州列強の 2 割程度に留まっていたのです。

総人口に占める高等教育修了者の割合（欧州と日本）

国	総人口	高等教育修了者	比率
フランス	4千万人	約4万人	0.10%
ドイツ	5.5千万人	約5.5万人	0.10%
イギリス	3.5千万人	約3万人	0.09%
日本	5千万人	約1万人	0.02%

高等教育を受ける若者が少ないということは、当然中等教育を受ける若者も少ないことを意味します。少なければ少ないほど、中等・高等の教育を受ける若者たちは、わが身に対する周囲の期待をひしひしと感じ、国家のため、さらには出身地域のために働かねばならないと、強く意識することになります。そんな彼らが中学校で、そして高等学校や大学で受ける教育は、尋常小学校や高等小学校で受ける教育とは全く異なるものでした。当時の初等教育と中等・高等教育の間では、教育方針が大きく違っていたのです。現在の教育システムでは、義務教育である小・中の間は勿論、中・高の間もまた、断絶ではなく連続性が目立ちます。最近流行りの中・高一貫校が高い人気を誇っているのもこのためです。

しかしながら戦前においては、初等教育は庶民教育に主眼があり、読み書き計算を教え込むと同時に、修身と歴史・地理の時間を用いて、臣民教育を徹底することを狙いとしていました。これに対し五年制の中学校以降は、エリート教育の場となっていたのです。進学者も少数に限定されました。こうしたエリートの卵が庶民と同じ意識でいることは、権力にとって甚だ都合が悪いのです。エリートは庶民とは隔絶した存在であることが望ましいのです。意識においても、実力においても、そして知識の質においてもです。ですから中学校でも後半の 4 年生や 5 年生の授業では、フランス啓蒙思想の憲法観やフランス革命の自由・平等の思想などが講じられ、日本史では皇国史観とは無関係に神話と歴史を峻別した講義が行われていたのです。それでも中学校段階では、師範学校や士官学校への進学者を含むこともあって、まだ遠慮がちだったのですが、君たちは庶民とは違うエリートなのだということを、強く意識付けすることを狙った教育が施されたのです。　続く



明治 30 年（1897 年）頃の東京帝国大学正門風景

訃　報

当館協力者で、機関誌『柿生文化』に、「鶴見川流域の中世」と題する連載記事をご執筆くださっていた中西望介氏が、膵臓がんのため 9 月 25 日未明に逝去されました。中西氏の論稿は、令和 2 年 2 月号（第 141 号）に始まり、今年 10 月号（第 161 号）まで、全 20 回を数えました。体調不良のため今年 8 月号を休載されましたが、体調のお悪い中 9 月号と 10 月号（第 160,161 号）をご執筆くださり、中世前半をまとめた形を整えてくださいました。この後中世後半の戦国期から近世の到来を見通すところまで続けて、ご自身のライフワークとしたいと張り切っておられただけに、志半ばでお亡くなりになられたことは、残念でなりません。

また中西氏は、当館のカルチャーセミナーの常連講師のお一人で、ここまで全 83 回のセミナーのうち、10 回の講師を務めてくださり、鶴見川流域の中世を熱く語ってくださいました。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

寺社の風景　石薬師地域文化財登録に際して

西光寺住職　山中聡英

お堂に収まった石薬師さま
かつては雨ざらしだった

当寺でお祀りしております石薬師像を川崎市地域文化財に申請しておりましたところ登録決定となりました。

西光寺の石薬師像は、川崎市内で唯一当寺にしかお祀りされておりません。それ故に地域文化財として永く護るべきとの観点からこの度申請を行った次第です。

この石薬師像は、寛文8年（1668年）7月に牛哲によって作られたと記されています。この牛哲なる方がどのようなお方なのかは残念ながら分かっていません。この寛文8年は江戸時代四代将軍家綱の頃です。當山では、二世里山可全大和尚が住職を勤めていた時代です。

最近になって江戸時代の古い過去帳を調べていましたら、この石薬師が祀られる経緯について推察できる発見を致しました。

當山二世里山可全大和尚さまは、御開山孤巌伊俊大和尚が西光寺を開かれた後暫く後継者が不在であった西光寺を復興された和尚さまです。この住職不在の間、西光寺を護ってこられた方のお一人が関翁尭鉄蔵主さまという方です。残念ながらこのお方もどのような方か分かっておりません。この関翁尭鉄蔵主さまは寛文8年（1668年）11月23日に亡くなられています。石薬師さまが出来た4ヶ月後に亡くなられました。

私が推察するに、里山可全大和尚様は西光寺に入られた際に、住職不在の西光寺を護ってこられた関翁尭鉄蔵主さまを大変大事に慕われていたのではないかと考えております。その関翁尭鉄蔵主さまが時に病に臥され、そのご快癒を願って里山可全大和尚さまはこの石薬師を祀られたのではないかと推察しております。石薬師さまが建立された年月、即ち寛文8年7月と、関翁尭鉄蔵主さまが亡くなられた年月、寛文8年11月と、時間軸がぴったり合致するのです。

更に、この石薬師さまには、建立年月日と、牛哲さんのお名前しか記されていません。一般的にお寺に何か寄進をされれば、施主名は必ず記します。それが無いのです。これは、この石薬師を里山可全大和尚さま自らの発願で造られ、お祀りしたという事になります。住職が自ら造ったものには、凡そ施主何某和尚とは記さないからです。

また、この関翁尭鉄蔵主さまの戒名の脇に骨相開基との記載があります。開基とは西光寺を開くに当たって必要な経済的支持を与えた者との意味です。つまり里山可全大和尚さまを経済的に補佐された方だということですが、骨相開基とあります。骨相開基と言うのを色々調べましたが、大財力で支えた方では無く、細々と支えたと言う意味のようです。

大檀那として支えた訳ではありませんが、一生懸命に西光寺へ入られた里山可全大和尚さまをお支えしたのだと思います。

古老の伝えし所によると、爾来地元の檀家さん方は、病気になるとこの石薬師にお参りされ、平癒を願ったものだと。不思議な事にその願いが叶う者が後を絶たないと言う。

今でも多くの方々がお参りになる有り難い石薬師さまであります。このコロナ禍の世をお救い頂くよう願って止みません。

柿生郷土史料館催物案内【参加自由、入場無料】

◎開館日：奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日　（原則として月4回）

12月　4・11・18 日（毎土曜日）　**1月**　9・16・23・30 日（毎日曜日）

◎開館時間：午前10時～午後3時（緊急事態宣言、蔓延防止等重点措置宣言下では休館です）

第19回 特別企画展　写真で見るふるさとの原風景

戦後における村々の変貌の過程や、各地の開発の様子など、柿生地区村々の変遷の様子をお楽しみください。緊急事態宣言等が再発された場合、宣言解除まで再休館・再日程となります。

期間　10 月 2 日（土）～ 1 月 30 日（日）　会場　柿生郷土史料館特別展示室